

I 中世の関宿

戦国時代、関東平野の中心部に位置する関宿は、大形河川の集まる地として内陸水上交通の要衝であるとともに軍事的な拠点としても重要な地でした。

康正元年(1455)に築田持助(もちすけ)が関宿に配置されて以降、築田氏が関宿を本拠地に古河公方足利氏筆頭家臣として、その地位を確固たるものとし、河川水上交通をも掌握し力を強め、この地を治めていきます。

この間、永禄元年(1558)、築田氏は古河公方足利義氏の関宿城移座によって古河城に移されますが、永禄5年(1562)、上杉謙信の関東南進を機に関宿城に戻ります。

その後、北条氏康、武田信玄、今川義元、上杉謙信らの関東をめぐる対立や駆け引きの中で、築田氏は後北条氏との3回にわたる関宿合戦の末、天正2年(1574)に関宿城を開城し水海城に逃れ、再び関宿に戻ることはありませんでした。関宿は徳川家康の関東移封まで後北条氏が治めることとなります。

